
トモダチ

星沢青嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トモダチ

【Nコード】

N4463V

【作者名】

星沢青嵐

【あらすじ】

ブログで書いたものです。これは、他人が怖いある少女と少女の気持ちがわかると言う少年の話です。

「いやだなあ・・・」

学校からの帰り道。

部活をしてない私は、1人ただただ歩く。

「おい、そのの！」

知らない男子に声をかけられた。

制服が新しいところから、私と同じ1年生だろう。

「部活は？」

「入ってません。入る気もないですし。あなたは？」

つい、癖で敬語で話してしまった。

ただでさえそっけなく思われる私の言葉は、敬語だとなつぱねるように聞こえるだろう。

まあ、いつも無口無表情の私には、突っぱねる友達もいないが。

「俺も部活は入ってねえ。入る気はあるんだがな」

「じゃあ入ればいいじゃないですか」

「・・・いろいろあつてな。入れねえんだ」

「・・・すみません。いやなことを訊いてしまって」

「いいんだ。どうってことはない。」

それより、お前、敬語やめたらどうだ？1年だろ」

「癖なんです。気にしないでください」

「ふーん・・・」

「なぜ私に話かけたんですか？」

率直に聞いてみた。

私は思ったことを声に出さずにはいられない人間なのだ。

「同じ匂いがしたから」

「・・・え？」

「お前、いつも1人でいるだろ？俺もそういつときがあったから。」

わかる気がするんだ」

話からすると、私が気づいてないだけで、彼は私を見ていたよ
うだ。

「好きで1人でいるんじゃないかねえんだろ？」

時々すぐえ寂しそうなおしてた」

「私は1人でいるのが好きです。別に寂しくもないですし」

「嘘だな」

「・・・ッ！あなたになにがわかるんですか！」

つい声を荒げてしまった。

彼の真剣に話す顔と、その目が、私のたった1人の友人だった
『彼』と重なってしまう。

そもそも、そこまで私を気にしていたということが、とても信じられなかった。

「あなたに私の何がわかるんですか！どうして私なんか気にするんですか！」

「さっきもいったが、俺にもそんな時期があったから」

「だからといって・・・ッ」

「わかるんだよ、俺には。お前がずっと我慢して苦しんでるのが・・・。」

「・・・人が怖いんだろ？誰も信じられないんだろ？」

「だって人は結局自分が大切だから平気で他人を傷つける！

『彼』だって、最後は私から離れていった！」

かつて、『彼』は私とある約束をした。

その約束は、

ずっと友達でいような

ただの口約束。

私だっでずっと友達でいれるとは思ってなかった。

むしろ無理だとわかっていた。

しかし『彼』は、真剣にそう約束しようといってきた。

友達のいない、対人恐怖症の私の 友達 として。

しばらくはずっと『彼』は私だけと一緒にいてくれた。

でも、所詮『彼』も人間だ。

友人をたくさんつくり、私と居る時間はどんどん減っていった。

そしてついに、『彼』は私を忘れてしまった。

連絡をとろうとしても、『彼』が私を無視するようになり、同じ学校なのに会う事はなくなった。

私は『彼』と話がしたくて、『彼』の居るクラスで待っていた。

『彼』は私を見るなりこう言った。

『お前、ストーカーかよ。気持ち悪いから二度と俺の前に現れるな。』

どっかいけよ』

ショックだった。

『彼』は完全に私を忘れ、約束のことなどなかったも同然になっていた。

それから私は、以前よりも対人恐怖症が酷くなり、学校にもいなくなつた。

それではダメだと、高校の受験前に思い、家からかなり離れたこの高校を探し当て、受験した。

「友達をつくれとは言わない。せめて、他人を認める強さをもて」

父親がいった。私もそうなりたと思った。

だから、毎日学校にきている。

でも、こわいものはこわい。

今の私は、『彼』となんら変わらない、冷たい人間だ。

だから・・・

「だから、私にかかわらないで」

私は夢中ではなした。

不思議と彼にはすらすらと話せた。

「私は人を傷つけないの！傷つけない一番いい方法は人とかかわりを持たなければいいっておもったの・・・！」

彼は泣きながら話す私を優しく抱きよせた。

それは、懐かしい『彼』の記憶をよみがえらせるものだったのに、私は彼の腕の中で泣き続けた。

「俺も、信じられねえ時があった。でも大丈夫だ。

お前が思ってるほど人間は怖くねえ」

「でも・・・『彼』は・・・ッ！」

「たまたまだ。たまたまそうなっちまったただけだ。

少なくとも俺はそんな人間じゃねえ。だから、俺を信じてくれ」

「なんで・・・私をそんなに気にかけてくれるの・・・？」

「お前と同じだったから、お前のつらさがわかるんだ。

・・・俺を信じてくれ。そして、俺と

友達 になろう」

一瞬、何を言ったのか分からなかった。

でも彼は、『彼』のように真剣に、『彼』とは違い温かく、真

実味のある声でいった。

彼は、私を変えてくれた。

たった一言で、私の心にあつた他人への恐怖心を溶かし、私の今まで生きてきたなかでついた傷を癒してくれた。

『私』を認めてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4463v/>

トモダチ

2011年10月9日13時15分発行